

令和 6 年 5 月 14 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K10573

研究課題名（和文）住民ボランティアの認知症予防と認知症者理解を目的とした園芸活動プログラムの開発

研究課題名（英文）A study on development of horticultural activities program for community volunteer aimed at prevention and understanding of dementia

研究代表者

寺岡 佐和（Teraoka, Sawa）

九州大学・医学研究院・教授

研究者番号：60325165

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：新型コロナウイルスの感染拡大により、予定より短期間の実施となったが、小規模多機能型居宅介護において、認知症である施設利用者（以下、利用者とする）と認知症でない地域のシニア世代のボランティア（以下、シニアボランティアとする）とを混合の対象に園芸活動を行った。その結果、シニアボランティアは園芸作業を通して、利用者の言動から認知症の症状に気づいていた。また、利用者個々人が今も有する様々な能力を感じていた。さらに、参加を重ねる中で、利用者の状況に応じた施設職員の対応を参考に自らの対応へ取り入れるなど、小規模多機能型居宅介護において利用者と共に行動する園芸活動は、認知症者への理解を促進することが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

小規模多機能型居宅介護の施設内で、認知症である利用者や認知症でないシニアボランティアとが、なじみのある植物を使用して共に園芸活動を行うことは、自然な交流のきっかけとなっていた。シニアボランティアは利用者との交流を通して認知症への理解を深めていた。また、利用者や施設職員とのかかわりを目的とする中で、シニアボランティア自身もかかわり方を修得し、実践していた。これらのことから、認知症者と認知症でない地域住民とが共に行動する園芸活動は、地域住民の認知症や認知症者への理解を深め、認知症者を適切に支援できる地域のマンパワーの養成方法として活用できると考えられる。

研究成果の概要（英文）：Although the implementation of the project was shorter than planned due to the spread of COVID-19, horticultural activities were carried out in multifunctional long-term care in a small group home, targeting a mixture of facility users with dementia (hereinafter referred to as users) and local senior volunteers without dementia (hereinafter referred to as senior volunteers).

The results showed that the senior volunteers recognised the symptoms of dementia from the users' words and actions through the horticultural tasks. They also sensed the various abilities that individual users still possess. In addition, it was suggested that through repeated participation, the volunteers could refer to the facility staff's responses to the users' situations and incorporate them into their own responses, thereby promoting understanding of people with dementia through horticultural activities together in multifunctional long-term care in a small group home.

研究分野：地域・老年看護学

キーワード：園芸活動 認知症高齢者 住民ボランティア 認知症予防 認知症者理解

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 認知症は未だその病態の解明が不十分で、根本的治療法や予防法が十分に確立していない。そのため、国内外を問わず、根本的治療法等の開発推進とともに、認知症高齢者を対象とする運動療法¹⁾や回想法²⁾等、様々な非薬物療法に関する研究がなされている。研究者らは様々な非薬物療法の中から、対象の運動機能に左右されず、個別でも集団でも実施でき、認知症の予防的ケアとして継続可能な活動の一つとして、2002年から施設入所中の認知症高齢者を対象に園芸活動(以下、園芸活動)を行ってきた³⁾⁻⁷⁾。また、2014年からは小規模多機能型居宅介護を利用しながら地域で暮らす認知症高齢者(以下、利用者)を対象に園芸活動を行い、生活能力の活性化に効果的な園芸活動の方法を検討⁸⁾しており、これまでに、園芸活動による認知機能の維持・向上は、認知症が軽度の方が効果を期待できること、園芸活動は特定の認知機能の維持・向上や精神的ストレスの軽減に役立つこと、コミュニケーションの活発化や生活意欲の維持・向上に効果的であること等が示唆された。

(2) 2012年、WHOは高齢化に伴う認知症者の増加を、世界共通の優先課題と報告した。同じく2012年、わが国では高齢者の4人に1人が認知症またはその予備群と推計され「認知症施策推進5か年計画(オレンジプラン)」が、2015年1月には「認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)」が策定された。新オレンジプランでは、認知症への理解促進を目指した普及・啓発や認知症の容態に応じた適時・適切な対応、認知症者を含む高齢者にやさしい地域づくりの推進が掲げられていた。研究者らは、この地域づくりの推進には、その地域で暮らす住民自身の認知症者への理解を深め、地域のマンパワーとして養成、活用することが効果的であり、持続可能な方法ではないかと考えた。

2. 研究の目的

(1) 小規模多機能型居宅介護の施設内において、認知症でないシニア世代の地域住民(以下、シニアボランティア)と利用者とを混合の対象に園芸活動を行うことにより、シニアボランティアの日常生活を活性化し、シニアボランティア自身の認知症予防活動のきっかけの一つとなる可能性があるか検討する。

(2) シニアボランティアと利用者とは園芸活動を共同で行うことにより、シニアボランティアの認知症への認識や気づき、言動にどのような変化が生じるかについて明らかにし、認知症者への理解促進の方法として有用であるか検討する。

(3) 上記(1)および(2)をふまえ、シニアボランティアの認知症予防と認知症者理解に効果的な園芸活動プログラムを検討する。

なお、本研究では園芸活動を、単に植物を育てるだけでなく、成果物の試食、成果物を用いた創作、植物の観賞、植物に関する話し合いなども含む、植物に関連した活動全般とした。

3. 研究の方法

(1) 園芸活動の方法

園芸活動は、月に1回、利用者とシニアボランティア、小規模多機能型居宅介護の職員(以下、施設職員)および研究者らが参加して小集団で行った(以下、集団園芸活動)。集団園芸活動以外の時には、利用者とシニアボランティア、あるいは利用者と施設職員とが水やりや草取りなどの日常的な作業を個別に行った(以下、個別園芸活動)。いずれの活動も、小規模多機能型居宅介護の施設内において行い、原則として、1回あたりの活動時間は60分以内とした。また、いずれの活動においても利用者の参加の意思を最大限に尊重した。

集団園芸活動の企画および運営は、施設職員と研究者とで行った。園芸活動で使用する植物は、研究者らの先行研究結果に基づき、夏野菜とチューリップの栽培は毎年栽培し、その他の植物は、集団園芸活動の場で利用者と話し合いながら決定した。雨天や酷暑、冬場の園芸活動に備え、プランターや植木鉢で栽培できる植物も選定した。なお、園芸活動時には利用者の安全を確認しつつ参加状況も観察するため、集団園芸活動の1回あたりの参加人数は、利用者10名以内とした。

(2) シニアボランティアの認知症予防に関する評価の方法

研究者らの先行研究結果⁹⁾をもとに作成した21項目で構成する「最近一か月間の日常生活状況」調査を、認知症のリスクスクリーニングとして、シニアボランティアへ定期的実施した。

得られた結果は経時的に項目別、カテゴリ別に分析し、日常生活の状況がどのように変化しているか分析した。なお、得点が高い方が認知症のリスクが高い生活であることを示す。

(3) シニアボランティアの認知症者理解に関する評価の方法

集団園芸活動終了後は、毎回、参加した研究者と施設職員、シニアボランティアとで、利用者の活動参加時の様子や活動内容について討議し、その日の活動内容や利用者の参加状況、企画や運営に関する反省や気づきなどを一致させ、その内容を記録し、蓄積した。各回の記載内容から、実施した園芸プログラムが対象の言動に及ぼした影響や、シニアボランティアの気づき等を整理、分析した。個別園芸活動終了後は、シニアボランティアが利用者で行った作業内容やその時の様子、自身の気づきなどについて個別園芸活動記録に記入し、その内容から、シニアボランティアの気づきや利用者を観察する視点に関する記述を抽出した。

さらに、先行研究^{10) 11)}を参考に作成した認知症受容度調査を定期的に行い、認知症者理解の状況を、知識尺度(15項目)、態度尺度(15項目)、認知症受容度(8項目)別に経時的に分析した。なお、得点が高い方が、認知症者に受容的な状態であることを示す。

4. 研究成果

8名のシニアボランティアから研究協力の同意が得られた。このうち、「最近一か月間の日常生活状況」調査および認知症受容度調査について複数回の回答が得られ、経時的变化が検討できた者は、8名中4名であった。

(1) シニアボランティアの認知症予防活動としての有用性について

シニアボランティア4名の「最近一か月間の日常生活状況」調査について、各カテゴリの1項目当たりの平均値の変化(表1)をみると、怒りっぽくなったり涙もろくなったりという「感情的反応」は増加していた。しかし、「生活意欲の低下」や「日常生活の困難性」は減少し、「よくある物忘れ症状」と「健忘的症状」は変化がみられなかったことから、日常生活は不活化していたわけではなく、シニアボランティアとしての園芸活動への参加が日常生活の維持や活性化に寄与し、認知症予防のきっかけの一つとなる可能性が考えられた。

(2) シニアボランティアの認知症者理解について

集団および個別の園芸活動記録の記載内容から、シニアボランティアの気づき等を抽出、整理した結果、シニアボランティアは、利用者が「昔やっていたことはよく覚えていて、上手に作業していた」「自分から話すこともよくあった」「自分の知識が役に立つからか、いきいきと楽しそうに作業していた」「一緒に作業することで、その人(利用者)の良さを見つけられたと思う」など、利用者個々人が今もなお有する様々な能力を感じていた。一方、「楽しそうに、他の人の鉢まで野菜を収穫していた」「感情が急に変わることがあった」など認知症がもたらす症状や言動にも気づいていた。そのほか、園芸活動への参加を重ねる中で、利用者の状況に応じた施設職員や他のシニアボランティアのかかわり方を参考に、自らも取り入れるなど、実践を試みていた。

また、認知症受容度調査について知識尺度、態度尺度、認知症受容度別に平均値の変化(表2)をみると、いずれもベースラインより半年後の平均値が高くなっていった。

以上のことから、利用者と共に行動する園芸活動は、シニアボランティアの認知症者への理解を促進する方法として有用である可能性が示唆された。

表1 シニアボランティアの日常生活状況の変化
(各カテゴリ1項目あたりの平均値)

カテゴリ	ベースライン	半年後
よくある物忘れ症状	1.25	1.25
健忘的症状	1.00	1.00
感情的反応	0.63	1.13
生活意欲の低下	1.05	1.00
日常生活の困難性	0.31	0.25

表2 認知症者理解の変化

理解の内容	ベースライン	半年後
知識尺度	47.4	47.9
態度尺度	40.5	43.5
認知症受容度	22.9	25.3

(3) 園芸活動プログラムについて

認知症である利用者とは認知症でない地域のシニアボランティアとを混合の対象に園芸活動を行った結果、シニアボランティアは「園芸は、作業しなくても見ているだけでもよく、誰でもできるからいい」「園芸という共通の接点があるから利用者とかかわりやすい」と振り返っていたことから、園芸活動は利用者の心身の機能や好みに左右されることなく、シニアボランティアに自然な交流のきっかけをもたらしていた。また、利用者が「昔やっていたことはよく覚えていて、上手に作業していた」「自分の知識が役に立つからか、いきいきと楽しそうに作業していた」ことから、夏野菜やチューリップといった馴染み深い植物を用いるプログラムが効果的であると

考えられた。

<引用文献>

- 1) Yoo J. E., Lee S. M., Lim H. S., Kim T. H., Jeon J. K., Mun M. H. : The Effects of Cognitive Activity Combined with Active Extremity Exercise on Balance, Walking Activity, Memory Level and Quality of Life of an Older Adult Sample with Dementia, *Journal of Physical Therapy Science* 25(12), 1601-1604, 2013.
- 2) 原元子, 下田裕子, 一ノ山隆司, 浜田由佳, 大橋由美子: 認知症高齢者のグループ回想法による回想内容と感情の変化の検討, *共創福祉* 10(1), 27-36, 2015.
- 3) 寺岡佐和, 小西美智子, 小野ミツ, 宮腰由紀子: 認知症高齢者への園芸活動が認知機能にもたらす効果; 園芸経験の有無別にみた 5cog と園芸活動に伴う言動・日常生活状況からの検討, *老年看護学* 21 (1), 59-68, 2016.
- 4) 寺岡佐和: 認知症高齢者の QOL 向上を目指した Diversional Therapy としての園芸活動の活用に関する研究, 2013. (博士論文)
- 5) 寺岡佐和, 小西美智子, 原田春美, 小野ミツ, 宮腰由紀子: 認知症高齢者を対象とした園芸活動が認知機能および心理社会的機能に及ぼす影響の検討, *広島大学保健学ジャーナル* 10 (2), 10-19, 2012.
- 6) 寺岡佐和, 原田春美: 認知症高齢者の継続的な QOL の向上を目指した園芸療法の方法に関する研究, *看護研究集録* 14, 73-84, 2007.
- 7) 寺岡佐和, 原田春美: 施設入所認知症高齢者の QOL 向上に寄与する園芸療法とその評価方法, *Quality Nursing* 9, 581-587, 2003.
- 8) Teraoka S., Konishi M., Ono M. : Effects of horticultural activities on daily living conditions of elderly with dementia; For practical care of supporting at-home living in a small scale multifunctional care facility in Japan, 32nd International Conference of Alzheimer's Disease International, 2017.
- 9) 寺岡佐和, 小西美智子, 鎌田ケイ子: 地域高齢者の日常・社会生活の状況と物忘れ自覚症状との関連性 - 認知症のリスクスクリーニングとして -, *日本公衆衛生雑誌* 52 (10), 853-864, 2005.
- 10) 黒田研二, 金高閻, 鄭小華, 増井香名子: 認知症の人に対する地域住民の受容的態度とその関連要因, *社会問題研究* 60, 27-35, 2011.
- 11) 金高閻, 黒田研二, 下園誠, 橋本恭子: 認知症の人に対する地域住民の態度とその関連要因, *社会問題研究* 60, 49-62, 2011.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Sawa Teraoka	4. 巻 10(1)
2. 論文標題 Effects of a three-year horticultural program on behaviors symptomatic of dementia in daily life among small-scale multifunctional care facility users	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Gerontological Nursing and Caring Research	6. 最初と最後の頁 11-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	鳩野 洋子 (Hatono Yoko) (20260268)	九州大学・医学研究院・教授 (17102)	文献検討、研究の企画への参画、データ分析への参画、園芸活動プログラムの検討

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------